

越中・富山における廻壇配札・配置売薬活動の 人間中心情報システムとしての考察

魚田 勝臣

要 旨

配置売薬の活動は古くから全国に見られ、修験を源流とする廻壇配札からの継承であることは先行研究によって明らかにされている。中でも富山における配置売薬は、先用後利の考えの下に、懸揚帳という顧客台帳に相当する帳簿によって、緻密な顧客管理を実現したことで名を知られている。越中富山における廻壇配札と配置売薬に関しては、古くから、経済学、経営学、商学、歴史学、社会学などからの研究が盛んに行われているものの、情報・情報システムとしての研究は少ない。小論では、富山における廻壇配札・配置売薬の活動が、情報システム学会が提唱する人間中心の情報システムとしての条件を満たすしくみであることを明らかにし、その有用性について考察する。

1. まえがき

情報システム学会では、新情報システム学体系化調査研究委員会(以下体系化委員会)において、2014年2月に“新情報システム学序説—人間中心の情報システムを目指して!”^[1](以下序説)を発刊した。ついで2015年12月に“同チュートリアル”^[2]を発刊して普及に努めた。これらに先だって、“富山配置薬に学ぶ人間中心の情報システム”のテーマでの報告がある^[3]。

序説では、最も基本的な概念である、情報、情報システムとは何かから稿を起し、人間中心の情報システムとは何かをも示した。すなわち、情報システムを人間の情報行動を組織化されたものと考えること(第一段階)とその活動が、人間に優しい、人間になじむや倫理的であるなどの目標特性を満足していること(第二段階)である。序説には、4.2節 技術による情報システム(サービス)の進展 (3)情報処理系 において配置販売システムが、5章 現代の情報システム事例においてデンマークとエストニアの電子政府^[4]が、そしてISMS(Information Security Management System)およびデザイン思考が事例として採り上げられている。この中で“人間中心”と明示されているのは、後の2者と考えられる。しかし、発刊後2.5年経った2016年8月時点でも、論

A Study of the Household Medicine Lease Activities in Toyama from the View Point of the Human Oriented Information Systems

Katsuomi Uota
専修大学 Senshu University

[論文]

2016年 8月22日受付

2016年 11月28日改定

2016年 12月26日受理

© 情報システム学会

文誌に“人間中心の情報システム”と銘打った論文⁴は少ない。理由として、人間中心の情報システムが今一步会員の間に浸透していないことや論文になりにくいテーマであるなどがあげられよう。理論を構築したら実践して事例として示し、人間中心に考えることによって世のため人のためになることを示し、その知見が現代の重要課題の根本的な解決に生かされることが肝要と考える。あるいは、過去において実践された情報システムが、人間中心であったことを示すのも有用であろう。また、未来に実現したいシステムを人間中心に考えて提案することも考えられる。要は人間中心の考え方が広まり、応用または研究されて数多の知見となって共用されることが必要と考える。

小論は、近世越中・富山の地域から全国に展開された廻壇配札・配置売薬活動が、当学会の提唱する方法に則って人間中心情報システムであることを示し、永年にわたり衆庶が参加して情報・情報システムを進展させ人々の幸せに寄与したことを考究する。

2. 先行研究の概観

情報技術、経済学、経営学、商学、歴史学などの分野の学究がそれぞれの立場で行った研究成果を概観する。

先行研究は4種に分けて考える。現代からさかのぼる順序で、①配置売薬の情報技術応用としての研究、②配置売薬に関する研究、③廻壇配札に関する研究および④両者に関する比較研究である。2章ではこれらの研究を概観する。小論はこれらの先行研究を基にして、情報・情報システムの観

点により人間中心の情報システムについて考察する。

2.1 配置売薬の情報技術応用としての研究

配置売薬活動に対し、情報技術を応用した情報システムを構築して利用するための研究である。

中尾哲雄による、“富山の売薬と情報産業”⁵は、江戸時代から現代に至る富山売薬の展開を概観し、その過程で培われた人材と資源が現在の富山の発展の基盤となったことを俯瞰的に分析している。

古川 勝ほかによる、“CRM の視点で見た家庭配置薬システムの可能性：コンティニュー認証機器を活用した日常生活圏医療”^{6,7}は、江戸時代とモンゴル国におけるCRM (Customer Relationship Management)を整理することを通して、わが国が抱えている保健・医療・福祉の分野における課題解決の糸口を見出そうとするものである。

CRM では、戦略目的を顧客価値（ひとりの顧客から得られる売上や利益）の最大化におき、その戦術として顧客との良好な関係を形成・維持するために適切なコミュニケーションを行う。その情報基盤として懸場帳を位置づける。つまり商人や商店のための対話という考え方であって顧客つまり人間一義ではない。そして、現代における配置薬システムの衰退原因を商品の品揃えやドラッグストアやコンビニエンスストアとの競合、販売員の教育不足などと分析している。情報技術やその産業としての見方に終始しており、人間中心の考え方とは思えない。

2.2 諸分野の学究による廻壇配札と配置売薬活動の研究

経済学、経営学、商学、史学など、それぞれの学問分野における先行研究がある。それによると、配置売薬の前に廻壇配札があり、それに先行して修験があったことが分かる。以下に著者ごとに著者名と題名を併記して研究内容を概観する。

(1) 配置売薬に関する研究

1935年に高岡高等商業学校（以下高岡高商、富山大学の前身）によって発刊された“富山売薬業史史料集^[8]”は、上・下巻と索引の3部からなる大部のもので、配置売薬研究の史料としていろいろな文献から参照されている。また、富山県による“富山県薬業史”も薬業の歴史を論文や記事、伝説などに基づいて詳しく論じている^[9]。

植村元覚による“富山売薬業商圈の成立”^[10]^[11] および“富山売薬商人の商業経営--とくに懸場帳を中心にして”^[12]^[13]、坂井誠一編による“近世越中の社会経済構造”^[14]、水島茂による“加賀・富山藩政と越中,近世越中の社会経済構造”^[15]、坂森幹浩による“反魂丹伝説の成立について—『富山反魂丹旧記』の再検討”^[16]、高瀬保による“富山売薬薩摩組の鹿児島藩内での営業活動—入国差留と昆布輸送”^[16]などがある。

これら諸研究では、越中富山が地政学的には配置売薬に有利なことは何もない、先利後利は当時の商習慣として当たり前のことで特徴とは考え難い、仲間組による入国差し止めの解除の活動や薬以外の物品の頒布などの諸点を明らかにしている。しかし、情報・情報システムとしての分析は不十分で、人間中心の視点にも欠けると考える。

(2) 廻壇配札に関する研究

先行研究によれば、配置売薬以前に、布教を目的とする廻壇配札の活動があったことが知られている。よって、この種の研究は、配置売薬の起源に関する研究と位置づけることもできる。

これらの研究の多くが参照しているのは、立山山麓の宮寺：芦峯寺（あしくらじ）の一山会が保有管理する文書が元になっている。この史料を中心にいろいろな分析研究が行われた。阿部政太郎による“宗教的村落の成立とその変遷—立山山麓の宿坊村芦峯寺を例として—”^[17]、佐伯立光による“立山芦峯寺史考”^[18]および“立山史談”^[19]、木倉豊信編による“越中立山古文書”^[20]、寺口けい子による“芦峯寺善道坊諸国檀那廻りの実態”^[21]、福江充による“近世立山信仰の展開：加賀藩芦峯寺衆徒の檀那場形成と配札”^[22]、“立山信仰と布橋大灌頂法会：加賀藩芦峯寺衆徒の宗教儀礼と立山曼荼羅”^[23]および“近世立山信仰の展開”^[24]（博士(文学)学位請求論文）、梅原隆章による“越中富山反魂丹の系譜”^[25]などである。芦峯寺の名称の初出は正平8年（1353年）の文書とされていて、慶長9年（1604年）の頃には、かなり広範な地域で廻壇配札活動が行われていたことが分かっている。

廻壇配札では、布教を情報の伝達として捉えた研究^[24]もある。それには①信仰の内容を情報として捉えること、②発信された情報、および③受信地と受信者の情報、に分けて考えるべきこと、①に関する研究は進んでいるものの、②および③に関する研究、とりわけ③の受信地・受信者のための情報の分析が進んでいないことを指摘し、歴史学の立場から③を重点に研究した。しかし、情報・情報システムの研究が未発達

の時代の研究であったため、受信地と受信者の情報としての研究は不十分であった。

なお、廻壇配札は越中立山だけでなく、霊山を中心に全国に見られる。各地では、僧侶、遊行聖（ゆぎょうひじり）や修験による勧進活動を行っていたことが分かっており、現在のところ、その発祥は900年頃と見られている。これらの活動から情報としくみを継承する形で展開されたと考え得る、物品を頒布する活動は全国に見られる^{[26][27]}。小論では、修験については詳しくは論じない。

(3) 両者に関する比較研究

梅原隆章による“越中売薬と立山信仰”^[28]、道正 弘による“富山売薬と修験道”^[29]、兼子心による“富山売薬の旅先における配薬の実態：立山宿坊の廻壇配札活動との関連性”^[30]などがある。

こうした諸研究では、両者の活動内容は極めて類似しており見分けが付きにくいことを指摘しているものの、布教と物品の販売という根本的な違いの追求が不十分で類似点と相違点を列挙するに留まっている。

以上(1)–(3)に示した通り、廻壇配札に関する先行研究としては、布教を情報の伝達として捉えた研究はあるものの、受信地と受信者の情報としての研究は不十分と思われる。その他については、情報・情報システムとしての研究は見当たらず、本研究はユニークであると考えられる。

3. 本論

序説には、情報システムが数例記述されている。その一つが越中・富山における配置販売である。小論ではこれを基に考究を進める。

配置販売 [1,pp.41-42]

『配置販売とは、消費者がいる所にあらかじめ商品を預けておき、適宜、販売員が巡回訪問し、使用した分の代金を受け取り、商品の補充や新商品を預けるシステムである。

配置販売の代表として近代以前から現代まで続いている富山の売薬システムがある。これは消費者の家庭にあらかじめ医薬品を預けておき、半年ごとに巡回訪問を行って使用した分の代金を受け取り、さらに新しい品物を預けるシステムである。置き薬業者が回る地域を“懸場（かけば）”と呼び、その地域の顧客管理簿や得意先台帳のことを“懸場帳（かけばちょう）”といった。懸場帳には優良な顧客、売れた薬の種類と数、家族構成、そして集金状況が記され、再訪問する際の服用指導や情報提供にも使用し、商売に欠かせないものであった。

情報システムの観点からすると、懸場帳は顧客情報や在庫情報などが記録されたDBであり、紙や筆記具が実現技術となる。また販売数や在庫数などの演算には算盤なども用いられたと考えられる。なお情報メディアが発達していなかった時代、人々は全国を回る置き薬業者からの伝聞で各地の情報を入手していたが、これにより配置販売システムが副次効果として情報メディアとしての役割も果たしていたといえる。

現代でも売薬システムは利用されているが、コンピュータを用いた要素システムとしてはPCやタブレット端末、LANや無線回線などを利用した配置薬業管理システムにより、業務の効率化を図っている。また新たな配置販売として、オフィスでの少量菓子販売システムがある。』

序説での“配置販売”は現代における情報技術を応用した先用後利のシステムを指している。また、“富山売薬”は近代以前から現代まで続く富山の売薬システムをさしている。

これに対して、小論では、富山前田藩が発展させた先用後利のシステムのうちの近世の活動を主対象とする。そして、はじめに配置売薬が廻壇配札からの継承であることを示す。

3.1 前田藩による配置売薬の起源について

配置売薬を越中前田藩が発展させたということについては、いくつかの先行研究が示すところであり異論はない。しかし、それが前田藩の創始によるという説については、議論が必要と考える。配置売薬の活動には、そのための情報(巡廻先に関する情報)と仕組み(対話を継続する PDCA サイクル)が必要である。小論では、当時の交通と情報伝播手段から、前田藩が数代藩主の間に整備できるとは考えられないことと、序説が提唱する情報と媒体の関係を根拠に、廻壇配札活動からの継承であったと考える。

はじめに、序説の指摘：

“これは消費者の家庭にあらかじめ医薬品を預けておき、半年ごとに巡回訪問を行って使用した分の代金を受け取り、さらに新しい品物を預けるシステムである。”

の活動の原形は、一般に前田正甫(まさとし)とされている。しかし、正甫が富山藩主となった 1674 年以前に、すでに“廻壇配札活動(檀那を廻り、護符などを頒布する活動)”が全国的に行われており、越中では立山、加賀では

白山、駿河では富士山、大和では大峰山などを霊山として布教活動を行っていた^{[26][27]}。

廻壇配札では、祈祷や護摩を行い、護符などを交付して布施や初穂を受け取る。それに対して、配置売薬では、病と薬効を説明した上で薬を配置して、次回巡廻時に使用分の料金を受け取る。二つの活動は目的と手段が異なるので、同列に扱うのには、これまで無理を伴うと考えられていた。しかし、序説が、“製品や販売活動を媒体に載せた情報提供”との見方を示したため、廻壇配札と配置売薬が同一の活動であると見なし得ることになった。すなわち、序説では製品や販売と情報および媒体の関係を次のように指摘している^[1,p.9]：

『“藤本隆宏は、ものづくりやサービスのプロセスの分析から、ものやサービスの設計情報が、アリストテレスの形相に相当することを見出している。藤本によれば、ものづくりのプロセスは、設計情報のやりとりをする情報システムであり、

製品＝情報＋媒体

製品開発＝情報の創造

生産＝媒体への情報の転写

販売＝情報の対顧客発信

消費＝情報の解釈

と見なされる。”』

このことを廻壇配札や配置売薬に当てはめると、頒布品は媒体に対応し、廻壇では護符や経帷子(きょうかたびら:死者の着物)、売薬では薬となる。事実、護符は煎じて飲まれていたという記録があつて、薬として扱われていた証とされ、廻壇配札においても、やがて物品の頒布が普通になったことが報告されている。また、配置売薬でも薩摩藩では昆布や

鯉節が売られており、廻壇配札と見境がつかなくなったことが分かっている。このように頒布の活動は巡廻先に対する頒布品を媒体とする情報の発信と考えることができるので、廻壇配札と配置売薬とは、情報システムの上からは、全く同一の活動と見なし得る。また、この場合の情報は巡廻者や媒体から発信して終わりではなく、どのように使われ役だったかななどの情報となって、次回巡回時に巡廻先から発信された。つまり情報は交換されていたと考え得るのである。

小論では、序説が引用する配置売薬を主対象に考究するものの、人間中心の情報システムであることを明確にするために、廻壇配札活動についても、同列で考察する。その際、布教と売薬はともに地域ないし個人を巡廻するので、巡廻活動と捉える。そして、媒体としての物品は頒布品と考える。

越中における廻壇配札活動の中心は、立山教の本山である芦峯寺と岩峯寺(いわくらじ)である。芦峯寺日光坊所蔵の慶長9年(1604年)の断簡文書から、規模は明らかではないが、慶長期既に三河国や美濃国や尾張国の村々に芦峯寺衆徒による檀那場が開かれていたことが分かっている^{[28] [29]}。つまり、前田正甫が藩主となった1674年に遡る70年前には、かなりな規模の布教活動が行われていた。富山藩は寺社奉行を通じて、立山教の両本山を支配していたので、小論では、配置売薬は、廻壇配札から、情報としくみを継承したと考える。この場合の情報は基礎情報学での生命情報、社会情報および機械情報の形を取った。

なお、更に遡って巡廻頒布活動の源流を探ると、修験の活動に行き着く。修験は役行者

(えんのぎょうじゃ)、役小角(おづの)を創始として、西暦900年頃には全国のかなり範囲で勧進活動を行っていたことが知られている。このように、情報システムの観点では、巡廻配札活動は900年頃から行われていた修験の活動に源流を求めることができる。ただし小論では、配置売薬の起源を廻壇配札とすることに止め、更にその起源を辿るのは他の研究に委ねる。

3.2 情報活動としてのPDCAサイクルの実践(人間中心の第一段階)

序説では、人間中心の情報システムを次のように示している。

人間中心の情報システムという考え方^[1,p.3]

『体系化で一貫しているのは、“人間中心の情報システム”という考え方である。

情報システム学会の設立理念でもある“人間中心の情報システム”には二段階の意味がある。

第一段階 情報システムを、情報にもとづいて行動し、行動によって新たな情報をつくりだす、人間の情報行動が組織化されたものとする。つまり、組織そのものを情報システムと見なしている。

第二段階 第一段階の組織としての情報システムが、“人間にやさしい”、“人間と調和(なじみ)のとれた”、“倫理的に価値が高い”などの目標特性を満たした状態である。

第二の段階まで達成されて、真の意味で“人間中心の情報システム”といえる。』

小論でも、巡廻配札・配置売薬の活動が情報にもとづいて行動し、行動によって新たな情報をつくりだす、人間の情報行動が組織化されたものとする。

序説ではまた、次のように指摘している[1, pp.22-23]。

『人間は生存目的を果たしていくため、他の人間と情報の交換を行いながら、PDCA サイクルを回し、その過程で、もっている知識を活用するとともに、新たな知識を獲得し蓄積していくと考える。

その様子を端的にモデル化して、図 1 に示す。この図で、Hの四角は、複数の人間の存在を表わし、保有する知識をベースに、それぞれ PDCA サイクルを回す。Dは、複数の人間の直接対話による、各自が得た情報の交換である。

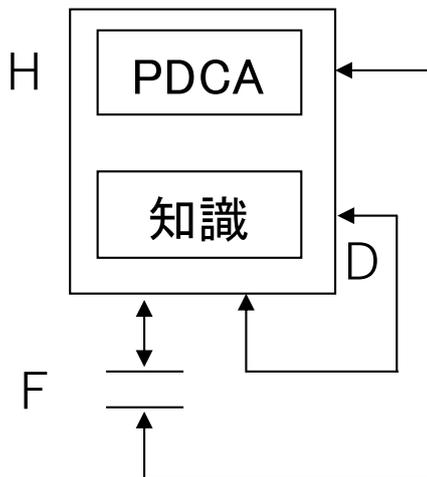


図 1 人間の情報行動とコミュニケーション

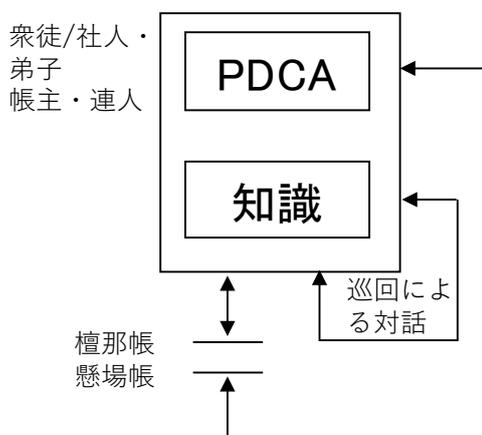


図 2 廻壇配札・配置売薬活動におけるコミュニケーション

人間は、より豊富な情報をもとに PDCA サイクルを回す欲求から、情報交換をする相手の範囲を拡大するための動きとして、① 空間的に人間が移動して、他の人たちと交流を図ることと、② 時間的に、F に保存して非同期で他の人に伝えることを図る。この時 F は、粘土板や紙など、情報を保存できる手段である。』

これは人間の情報行動とコミュニケーションが PDCA サイクルによって進化する過程を示すもので、第一段階を補足するものと考えられる。つまり、小論では廻壇配札や配置売薬において図 1 の考え方で、情報行動とコミュニケーションを行っていたと考える。具体的には、①巡廻者が巡廻先(檀那場または懸場)に空間的に移動して、巡廻先の人々と対話を通じて情報交換する(D)。②巡廻者のための情報で、記録の必要なものは檀那帳(廻壇配札の場合)または懸場帳(配置売薬の場合)に記録として保存する(F)。それらを含めて、巡廻者と巡廻先家族とが得た情報は知識として蓄積される。つまり情報は時空を超えて伝播される。すなわち、序説の図 1 は廻壇配札・配置売薬の活動では、図 2 のような形で実践されていた。ここに、檀那帳や懸場帳は基礎情報学での機械情報であり、対話は社会情報と生命情報と考える。つまり、言葉として交わされるものが社会情報、印象などによって交わされるものが生命情報である。以下、この区分に従う。

人間の記憶は時間とともに薄れるので、知識も常に更新しなければならない。そのために双方で対話という形で反芻される。つまり、巡廻先では時間をかけて情報交換が行われた。序説が引用するジャレド・ダイヤモンドによるニューギニア先住民は『時間さえあれば、時には夜を徹してでも、話し合いをしている』こと

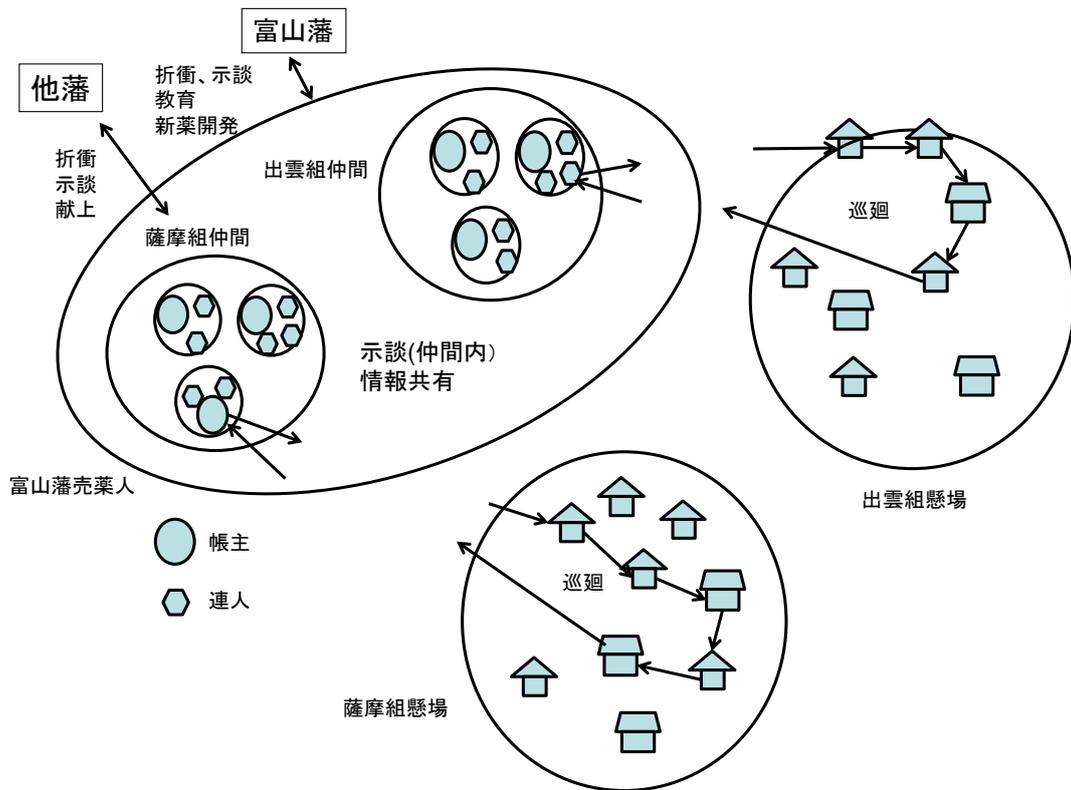


図3 越中・富山の配置売薬における懸場と仲間組での活動

を取り上げている[1,pp.17-18]。これと同様のことが巡廻先で実施されていたのである。また、序説の“生存目的”は時代とともに変わるので、小論では知識もそれに応じて変わると考える。

廻壇配札や配置売薬の活動を考えるために、配置売薬の場合に関し、懸場における活動と仲間組の活動を図3に示す。この図には出雲組と薩摩組の二つの仲間組を示してある[9,pp.204-209] [12,pp.39-19] [16, p.229]。

それぞれの仲間組は許可を得て、一斉に富山藩を離れそれぞれの懸場に向かう。懸場に至る道筋や宿は予め決められている。懸場に到着すると、帳主ごとに、帳主と連人がそれぞれ巡廻先を訪問して情報交換し、頒布品(薬や進物品)を渡して報酬を得る。預けてあって使用した分だけ報酬を得る場合(先用後利)と、

代引きの場合がある[8,pp.1962-1964]。この場合、情報は生命情報および社会情報として交換され、一部は機械情報として檀那帳や懸場帳に記載される。

巡回中に発生する事故や病気、窃盗や強盗などに対処するために、相互扶助の取り決めもなされている[9,p.367] [16,p.235]。これらは社会情報として弟子や連人に伝えられ、機械情報として示談で取り交わされた。巡回先をすべて巡ると懸場を離れて、富山藩に戻る。

巡回は年内か遅くとも年明けには終わるので、帰藩後仲間が集まって、情報交換する。巡回先での出来事や対話の内容が話題の中心である。こうして、売薬人は全国を巡ってきた仲間と情報共有ができるのである。一方、仲間組こぞっての巡回先藩との折衝や巡回先での行動などについても話し合わせ対応する。こうし

た活動にも農閑期が最適であることは論をまたない。情報交換は対話つまり社会情報ないし生命情報として交換され、示談文書以外は機械情報化されない。つまりほとんど記録に残されていないのが特徴である。

以上、配置売薬について述べたが、情報システムの見方によれば、廻壇配札の活動も全く同じと考える。巡廻配札では、目的の一つに立山詣でへの勧誘がある。衆徒・社人は坊の主人である。立山詣でには、当時の知識人である行者、遊行聖、僧侶や文人・画家などが訪れ、勧進活動によって地域と交流している。これから得た情報も共有され、巡廻先に提供された[17,p.127]。

それぞれの活動において、PDCA サイクルがどのように行われたかをまとめると、表 1 のようになる。修験については、先行研究を深めていないので参考のために示す。

表 1 は左端から右へ、活動名、Plan、Do・Check および Act を示す。Do と Check は同

時進行するので、同一列に記してある。Plan および Do・Check には、活動者の名称と参照情報を上段に記し、下段に活動内容を記した。

廻壇配札の衆徒と社人は、それぞれ仏教における僧侶と神道者を指す。立山教の本拠であるとともに、霊山立山参詣者のための宿坊を営む主人でもあった[19,p.60]。

檀那帳(廻壇日記帳など)や懸場帳(または薬懸帳など)は、巡回時の情報を記載した顧客台帳に相当するものである。配置売薬の場合は、営業権を証明する文書でもあり、その持ち主を帳主と称した。帳主と連れだつて巡回する者を連人といい、配置売薬では重要な役割を果たしていた。その証左に、懸場帳の売買では大抵の場合、連人を相添えると記載されている。連人は情報の記憶補助としても重要な役割を担っていた[12,pp.43-52]。

以下に、PDCA サイクルを実践した模様を、配置売薬について情報システムの見方から具体的に記述する。

表 1 越中・富山の巡廻配札・配置売薬における PDCA サイクルの実践

	Plan	Do・Check	Act
修験道	修験者/記憶 巡廻計画(護摩・護符の準備)	修験者/記憶 巡廻/勧進・対話→信頼	一所不在・山岳跋涉 解脱の境地
廻壇配札	衆徒・社人・弟子/知識・檀那帳 巡廻計画(護符・物品の準備)	衆徒・社人・弟子/知識・檀那帳 巡廻/大庄屋廻り・対話→信頼	寄り合い・富山藩寺社奉行・他藩 情報共有・示談/折衝、曼荼羅改定
配置売薬	帳主・連人/知識・懸場帳 巡廻計画(薬・物品の準備)	帳主・連人/知識・懸場帳 巡廻・対話→信頼	仲間組・富山藩奉行・他藩 情報共有・示談/折衝、教育、新薬開拓

(1) Plan

Plan の段階で、巡廻者たち(帳主と連人)は懸場帳を参照しながら計画を練った。どの地域をどんな順序で巡廻するか、それぞれの巡廻先ではどんな対話(情報交換)を行うか、そのときの重点は何か、それに対応した情報伝達の媒体(頒布物:薬など)は何か、収受したい報酬は如何ほどかなどである。巡廻先の家や人々の顔を思い浮かべながら計画した[12,p.35]。このため、江戸中期までの懸場帳は巡廻順に記録した。江戸後期になると、戸ごとにページを設け、巡廻先の情報を時系列的に把握できるようにした懸場帳も見られる。PDCA の実践によって、懸場帳が進化していることが分かる[30,pp.8-10]。

(2) Do-Check

Do と Check の段階で、それぞれの巡廻先で対話が行われた。特に重要視されていたのは対話の内容で、時代や巡廻先ごとに異なる。対話の内容を今風に表現すると、すべて“個人情報”であった。巡廻者と巡廻先家族の間には信頼関係があったので、どんなことでも胸襟を開いて話し合われた。どこに結婚適齢期の息子や娘がいるかなどを把握していたし、それぞれがどんな職業を持ちどの程度の収入を得ているかなどについても概ね分かっていた[12,p.40]。いろいろな情報を集め人々の役に立つ活動を行って信頼の醸成を図っていた。どのような情報は秘匿されねばならないか、それも時と場合によっては、巡廻先を超えて交換しなければならないかなど目的ごとに理解し実践していた。その基準は、「世間」であり「人間になじむ」ということであったと考えられる。

Plan と Do-Check は巡廻者それぞれが自由な裁量で行った。対話の内容は、生命・生存・生活の全般に関する情報であった。

マスメディアが存在しない時代なので、巡廻者が諸国(藩)を回って集めてくる情報は巡廻先で貴重で物珍しかった。巡廻先ごとの生活様式や慣習、職業、病歴や投薬などの個人情報が知識として永年に渡って集められ蓄積された(図2)。これらの情報は巡廻者・巡廻先とも、世代を超えて継承されかつ門外不出を原則とした。情報は、基礎情報学で言う生命情報や社会情報を主体とすることもあって、記録に残されていない。専ら記憶に頼っていた。先行研究には、探しても見当たらないとの指摘が散見されるが、当然と考えられる[30,pp.8-14]。

なお、配置売薬では、一般に薬だけが扱われていたように考えられているが、実際には巡廻先の要望に応じて、昆布などの海産物や他地域の物産なども扱っていたし、禁断の布教や祈祷などの活動も行われていた[16,pp.245-255]。すなわち、巡廻先の要望に応じる形で多様な情報交換が行われていたのである。

(3) Act

Act は、より大きな枠組みで反省をし、行動を起こす活動である。配置売薬では、懸場毎に仲間組を形成していた。つまり、仲間組の内部、仲間組と仲間組、仲間組と富山藩、仲間組と他藩など組織の間の回顧や折衝を行うもので、巡廻が終わった後に活動することを原則とした。ただし、急を要する案件については、巡回先でも処置された[12,p.39][16,pp.226-238]。

仲間組内または仲間組の間で行われる情報交換はとりわけ大切にされた。帳主と連人が巡回する場所と巡回先(つまり懸場)は固定されていたので担当地域のことしか判らない。他の仲間組と情報を交換共有することによって、

次回巡回時の話題に事欠かなくなるのである。マスメディアが存在しない時代に、巧妙に情報の収集と共用の仕組みを構築していたことは驚異に値する。しかもこの活動に農閑期が絶好の機会であったのである。

なお、巡廻先で収集された情報のうち富山藩に必要なものは藩が集め、他藩との折衝や諜報活動のために利用していたと考えられている[5, p.658]。

このような Act の活動の中での折衝も示談と呼ばれ、示談によって成文化された文書も示談の名称で記録に残っている。Act は巡廻者が快適に活動するための掟となるだけでなく、次代を担う幼年者の教育や新薬の開発などに活かされた。

富山藩の売薬人の活動は、受け入れる藩にとっては衆庶の生活に役立つ反面、報酬を得て財を富山藩への持ち出すことになるので規制の対象となった。そのための交渉は仲間組と巡廻先藩の間で行われ、その経過と結果が示談にまとめられ、互いに遵守した。示談が巡廻者の行動規範となっている。別の見方をすれば、示談という制約の下に巡廻者は自己の自由な裁量で活動が続けた。特に戸別の巡回では密室で情報交換が行われるため、藩によっては禁止されている布教活動なども実際には行われていた。おそらく衆庶の求めに応じたものであろう。しかし、示談は破られることもあってその都度示談の内容が改められ、厳しい場合は入国差留になった。仲間組はその解除に注力し莫大な金品を巡回先藩やその有力者に支払った。言い換えれば、仲間組はそれだけの交渉力と資金を保有していたということである。

売薬によって力を得た仲間組のあるものは、巡回先藩との折衝に基づき、北前船を仕立て

て昆布の輸入や販売を手掛けるものもいた。薬以外の頒布品が扱われていたのである。逆に巡廻先から禁止されている薬種の買付なども行われていた[16,p.255,pp.238-244]。

以上、配置売薬について述べたが、廻壇配札についても、情報システムの観点からは同一であった。表1に示すとおり、巡廻者は衆徒(仏教系の場合)または社人(神道系の場合)とその弟子であった。巡廻の目的は布教という情報の交換で、祈祷や説教が行われ布施や初穂が納められた。趣旨によっては1年送りのこともあった。Act は所属する坊ごとに行われた[21,pp.16-22]。

廻壇配札、配置販売ともに、巡廻者は Plan-Do-Check を中心に自由に活動し、必要な Act に参画する形で、PDCA サイクルを実践し、巡廻先家族を含む参画者全体が情報とそれを扱うしぐみを進化させていた。

人間の活動は PDCA サイクルによって、常に進化することを目指すので、廻壇配札が始まって以来この活動は継続され進化している。PDCA サイクルのしぐみを大枠では守りつつ、情報としぐみを細部から大枠に至る所で進化させて今日に至ると考えるのである。情報としぐみが衆庶に役に立つことで存在意義があり、意義がある限り受け入れられ存続する。こうして巡廻頒布活動が永年に渡って維持発展した。

以上、廻壇配札および配置売薬の活動が、人間の情報活動としての PDCA サイクルを実践していたことを示し、両活動が人間中心の情報システムの条件としての第一段階を満たすこと示をした。要すれば、組織の活動を情報システムと考えて、永年にわたり PDCA サイクル

を回すことにより情報を生み、その情報が所期の効果をもたらす新しい情報を生んだ。この情報としくみが初期の護符という現代の科学では、効能のない媒体が効果をもたらす、しくみが継続されやがて効果を持つ薬という媒体が出現して更なる進化を遂げたと結論できるのである。

3.3 目標特性の充足(人間中心の第二段階)

廻壇配札・配置売薬活動が真の意味で“人間中心の情報システム”というために、第二段階の条件すなわち情報システムが、“人間にやさしい”、“人間となじみ(調和)のとれた”、“倫理的に価値が高い”などの目標特性を満たした状態であることを示す。小論では、“人間にやさしい”、“人間となじみ(調和)のとれた”、“倫理的に価値が高い”を区別して論じるのは難しいと考えるので、ひとまとめにして扱う。

小論では、廻壇配札・配置売薬が目標特性を充足することを明らかにするために、つぎの事がらを考察する。①農閑期の余裕時間を活用していたこと、一斉に藩を出発し懸場帳に到着して、帳主毎に活動し報酬を得て、雪に閉ざされる前に帰藩していたこと、②副業であったため過度の競争を避けることができ、信頼の醸成に重点を置くことができたこと、③布教活動を起源とし、自らも信徒であったため、世のため人のためという信念が生きていたことである。

(1) 農閑期の余裕時間の活用

主要な活動時期は、農閑期(10月頃から翌年の春にかけて)であることが分かっている。越中での収穫が終わって、巡廻者は心にも懐にも余裕がある時期である。そして、巡廻相手先も同様に余裕がある時期を選んだ。

つまり、農村であれば農閑期、漁村であれば漁の少ない時期、商人や武家についても同様の選択基準で時期を選んだ。こうして、巡廻者・巡廻先双方にとって心と懐に余裕のある時期に活動を行った。

他藩を通過した他藩で活動するために富山藩から許可または許可証を得て、一斉に藩を出発する。仲間組毎に経路も宿泊先、荷物も決っていて、道中の安全も確保されている。仲間は気心が知れた顔なじみであり、楽しい旅路であった[8,pp.279-280]。しかし、徒歩の場合は老年者にとっては厳しく体調を崩すこともあり、重篤な場合は旅先で死亡することもあった。このような場合は近くにいる者が助けること(相互扶助の義務)や当該藩での救済処置などについて示談で取り決められていた[8,p.231] [24,p.119]。こうした安心確保の工夫も歴史的に積み上げられたものであった。

富山藩と檀那場や懸場の間の荷物は、距離や重量を考慮して陸路だけでなく海上(北前船など)や湖沼も利用された。つまり、できるだけ労苦の少ない、人に優しい手段が選ばれた。

巡廻先の多くは農民、漁民で定住性が高く、毎年おなじ家・同じ顔ぶれである(図3の巡廻)。余裕がある時期に、諸国を巡っての情報を伴った巡廻者を心待ちにした。しかも巡廻者・巡廻先とも互いになじみ深く、この関係は世代を越えて継承されており、信頼が蓄積されている。心を開いて巡廻者からの情報を受け自らも情報発信した。巡廻者達は楽しい酒食の会合にも招かれ、隠し芸を披露するなどにより交流を深めた。

帰藩の時期は業績の多寡や対話の弾み具合などの理由により変わることがある。その場

合も、示談によって雪に閉ざされる時期を避ける工夫もなされていた。

帰藩後、雪に閉ざされる期間は、やることなく、賭博に走り酒色にふける者が出る。Actの活動はこうしたことを避ける狙いもあった。外での活動が制約を受けるので、時間をかけて諸国の情報交換ができたと考えられている。諸国での見聞は、聞く方も楽しい。一方で疫病の流行などの情報ももたらされた[11,p.68]。こうした興味のある活動に導くことにより、悪事に走らせないようにしていた。それが情報の収集と蓄積をもたらしたのである。

廻壇配札においても、情報・情報システムの観点からの事情は同じで、活動も同一であった。衆徒・社人、弟子は、芦峠寺または岩峠寺において農業に従事しており、生業の条件は、配置売薬と同じである。副業として立山詣でのための宿坊を営んでおり、巡廻配札では講を組むための指導や誘致活動を行っていた。一山会の文書はこうした活動の記録を残しており、先行研究が内容を明らかにしている[17,pp.130-132]。

なお、檀那場と懸場は入り組んでいた。つまり、同じ家が廻壇配札、配置売薬両方の巡廻者を受け入れ、双方から情報を得ていた。言い換えれば、情報は巡廻先で交わっていたのである。

(2) 信頼維持と競争回避の工夫

信頼を維持する工夫とそのための競争を避けるしくみが設けられていた。

信頼の維持は活動の生命線であった。同時期にどの家族にも廻壇配札と配置売薬の巡廻者が訪れる。巡廻先家族の関心を引き、親身になる対話が信頼維持のための鍵となる。言い換えれば、情報の内容とそのなじみや価値が重要であったと言える。そのため、

戸ごとの対話は時間をかけて綿密に行われた。懸場帳から一日に巡廻したおおよその戸数が読み取れる。平均 4 軒、多くても 6 軒程度であった(1755 年の例)[30,p.8]。戸ごとの対話の内容が門外不出であったのは当然で、記録が残っていない。話の内容の種別らしい符丁が檀那帳に見られるが、それも解読不能とされている。

信頼維持のためには過度の競争を回避しなければならない。そのため檀那場や懸場は厳しく守られた。新しい巡廻先を確保する新懸け、既存の懸場の譲渡は、関係者がこぞって示談をして決め以後遵守した。檀那場や懸場を固定し、変更には相当の手続きを踏むことで競争を避け安定させ、もって信頼確保に努めたと言える。

配置売薬の活動が、副業であったことが過度の競争を避け得た根本的な理由と考えられる。つまり、定められた期間に帳主と連人が巡廻して所与の収入を得れば、それ以上は望まなかったのである。しかし、原価率の低い薬や珍しい他国の品物を扱うことで、実際には相当の利益を得ていた[11,pp.59-60]。けれどもそうした内情を悟られないようにすることも示談で定めていた。信頼を損ねることを恐れたのである。

(3) 倫理的に価値が高い

宗教活動は、人間の生きる道、前世および来世を取り扱う活動である。配置売薬は廻壇配札から情報としくみを継承しており、ともに倫理的価値が高いといえる。

配置売薬の発祥としての廻壇配札では、衆徒・社人とその弟子が、勧進に訪れ護符などを頒布する。檀那は感謝し、分相応の布施や初穂を納める。衆徒・社人とその弟子は、それに感謝して、祈祷した箸、茶などを渡

す。

大庄屋廻りの場合は立山曼荼羅を用いて、集まった人たちに説教をする。曼荼羅の内容は、前世、現世および来世に関するもので、檀那廻りの対話によって、双方が影響しあい常に変化した[24,pp.95-102]。つまり、情報は交換され、情報によってしくみが変わり続けたのである。しかも、どちらが主体と言うこともなく、みんなで協力し合っていた。

こうした情報としくみが配置売薬に継承された。この場合は、いのち、病と薬の用法が情報の主体となる。医師に頼れない衆庶にとって、生きていく上での知識を得て自らを守らねばならない(自己治療)。帳主や連人はその伝道者であり、ほとんどは一向宗の熱心な信徒であった。病に悩む衆庶を救い、それによって布教を行うという信念を持っていた。こうした情報交換、つまり布教は実を結んだに違いない[16,p.235]。ここに述べた情報は、生命情報、社会情報および機械情報の形を取ることは言うまでもない。

以上の感謝と感謝の応対は、先用後利つまり1年送りの場合は、更に明示的になる。つまり、廻壇配札の場合、火の用心や未病息災の祈祷を受けて、護符を受け取る。次回巡回時には、それまで守っていただいたお礼に布施や初穂を納める。一方、配置売薬の場合は、配置された薬を用いて、病の苦痛から救っていただき、そのお礼に金品を支払う。そして、おまけに相当する物品を受け取るのである。つまり感謝と感謝の交換が行われる。倫理的価値が高いと言えるし、人間になじむ、優しいとも言える活動であった。

以上、組織としての廻壇配札および配置売薬の活動が、“人間にやさしい”、“人間と調和

(なじみ)のとれた”、“倫理的に価値が高い”などの目標特性を達成するために行われていた。人間の生存目的は変わるので、達成の多寡の判断は、常に流動するものであったが最終的には巡廻先家族が決めた。永年継続していることが最も上位の指標であったのは言うまでもない。

よって、巡廻配札および配置売薬の活動は、真の意味で“人間中心の情報システム”といえる。これは永年に渡る PDCA サイクルの実践によってもたらされたものである。

4. まとめと今後の研究

4章では、本考究のまとめと今後の研究課題を示す。

4.1 まとめ

以上、越中・富山で展開された近世における廻壇配札、配置売薬の活動をまとめると次のようになる。

(1) 先行研究に基づいた小論の考究により、廻壇配札および配置売薬の活動は、人間の情報活動を組織化したものであり、PDCA サイクルによって進展し、“人間にやさしい”、“人間に寄り添い、なじみのとれた”、“倫理的に価値が高い”などの目標特性を満たした人間中心の情報システムと結論づけることができた。

(2) 情報システムとして見れば、廻壇配札と配置売薬の活動は同一であり、“巡廻頒布活動”としてまとめることができる。二つの活動は永年にわたって併存し、衆庶が参加、支持して進展し続けた。小論では、近世に焦点を当てて二つの活動を考究した。

(3) 交わされた情報は、人間の生命・生存・生活全般に関するもので多岐にわたった。すなわち、命をつなぐための出産、医療、施薬、介

護など、命を永らえるための食物、食習慣、食生活など、生活のための縁談、生死、宗教（念仏や加持祈祷）や文化などである。情報は、巡廻者の判断で選択提供され、巡廻先家族との間で交換された。

巡廻者は宗教的な裏打ちがあったので、救世済民の志が強く、薬をもって衆庶を救うことに徹することができた。そのことは巡廻先に歓迎され信頼が継続した。戸別訪問では密室で対話が行われたので、巡廻先藩からは禁じられた布教活動も実際には行われ、双方とも影響があった。

廻壇配札と配置売薬は、それぞれの活動の中で得た情報を集約させ共有した。国内他藩からの情報、僧侶や文化人らによる諸外国からの情報なども加わり、機械の助けを借りることなく、有用で大きな情報基盤を構築した。

情報の多くは、基礎情報学で言う生命情報や社会情報でかつ個人情報であるため、記録に適さず秘匿・世襲された。情報基盤は、概ね閉ざされる冬に富山藩内で交換された情報をもとにして編集・構築され共用された。

(4) 情報の媒体である頒布品については、廻壇配札・配置売薬両者の間で根本的な違いは見られず、同一であると考えられる。主なものは、前者が護符、後者が薬という基本は守られているものの、それ以外の頒布品については、巡廻先の求めに応じる形で双方とも同様な物品が提供された。情報システムの観点から、情報を運ぶ媒体と見るならば当然のことである[10, pp.3-5]。

配置売薬は、地政学的には富山が有利な条件は何もなかったと考えられている。それが、富山に富をもたらした電力や金融、情報など多くの産業の源になったのは、人間中心の情報

システム：配置売薬の情報基地としての永年に渡る継続によるものと結論づける。そして、情報基地は巡廻者と巡廻先双方の信頼の確立・維持を一義として実践されたのである。

以上の思考過程と結論は、今後いろいろな課題の分析や解決策の模索に役立てることができると考えている。たとえば、先行研究でとりあげた、CRMの元祖とまで讃えられた配置売薬が情報技術応用により発展した後衰退したのは、小論によれば、人間中心の二段階の活動でなくなったことに原因を求めることになる。すなわち、第一段階としてのPDCAサイクルが実践されなかったことおよび第二段階としての人間に優しい、人間になじむ、倫理的に価値が高いという諸条件を充足できなかったことである。初期に、配置売薬から信頼を継承し、情報技術を応用して活動したときは、効率向上を果たすことができた。しかし、企業視点からは、ひとりの顧客から得られる売上や利益の最大化を追求する手段としてのコミュニケーションを指向することになり、顧客にとって好ましい対話とはなりえなかった。また、“信頼を維持するために過度の競争を避ける”とは、正反対の行動を取らざるを得ないし、顧客の心に余裕のある時期に訪問するのも難しく、継承した信頼を失っていった。以上要すれば、配置売薬の情報としくみは、現代日本における配置販売システムとしては、不適切なモデルであったと結論づけることができる。他方、モンゴル国やタイ王国で、成果をあげているのもうなずける。

一方、若い世代に目を転じると、専修大学経営学部森本ゼミナールの皆さんが、森本祥一准教授の指導のもとに、南魚沼市辻又地区において限界集落の「情報システム」による活性化プロジェクトを立ち上げ、人口減少によ

り分断された情報活動の修復に挑戦している[32]。この活動は情報システムの観点から、懸場における売薬人の活動と軌を一にするものである。しかも南魚沼はかつて富山・配置売薬の懸場であった[30]。限界集落の活性化という、身近で重要な課題に、小論の考究が役立つと考える。

この巡廻配札・配置売薬のモデルを今後応用するとすれば、小論で示した人間中心の情報システムとしての条件を満たす環境設定下で、モデルの理解者を構成員として活動を開始し、余裕時間やお小遣いによる小さな奉仕活動とそれに見合う幸福感が得られ、継続をもって最大の成果とするような活動と考えている。つまり、ソーシャルなあるいはボランティアな活動である。

4. 2 今後の研究

今回小論では、廻壇配札・配置売薬の活動が人間中心の情報システムであることを示した。今後も研究を継続し、次の点を明らかにしたいと考える。

(1) 小論による廻壇配札・配置売薬に関する結論は、國領二郎による“ソーシャルな資本主義”[33]、金子郁容らによる“ボランティア経済の誕生”[34]、山岸俊男による“安心社会から信頼社会”[35]などの研究と一脈通じるものがあると考えている。これら先達の研究と関連づけ、人間中心のしくみや考え方を応用できないか模索したい。

(2) 巡廻頒布の活動を進展させた理由の一つに、示談という枠組み(Act)の中で、帳主と連人が自由に情報交換活動(Plan-Do-Check)を行った特有のPDCAサイクルがあったと考えている。このような、大きな枠組みの中の自由な振る舞いによるPDCAサイクルのしくみの

本質や効用について考究を進めたい。

5. あとがき

本研究は近世 250 年余を一括りにして考察している。先行研究を根拠としているものの、箇々の史実については、小論の主張とは異なる場合もある。たとえば、小論では、配置売薬の活動のプラス面を捉えているが、時代によっては、懸場の往復中に山賊もおり、宿には盗賊もいて労苦もあった。そうした時に、身を処す宗教に裏打ちされた巡廻者の精神力もあったと考えられている。また、PDCA サイクルの実践によって、それらが乗り越えられて活動が継続された。そのことをもって、マイナス面の史実は一応さしておいて、あえてプラス面を強調したことを理解願いたい。もちろん著者の勉強不足によるところも大きい。

日本には多くの学会があって、いろんな分野の研究をしている。専門分野を進化させるためには、学界の細分化はやむを得ないが、連携がないのが問題とされている。情報システム学会は、そうした現状に鑑み、情報・情報システムの観点で関連づけて、新たな知見を見出し、貢献できるのではないだろうか。

参考文献

- [1] 新情報システム学体系化調査研究委員会, “新情報システム学序説—人間中心の情報システムを目指して!”, 情報システム学会, 2014.
- [2] 新情報システム学体系化調査研究委員会, “新情報システム学序説—人間中心の情報システムを目指して!”, チュートリアル, 情報システム学会, 2015.
- [3] 魚田勝臣, “富山配置薬に学ぶ人間中心の情報システム”, 情報システム学会第9回全国大会・研究発表大会, 情報システム学会, 2013.
- [4] 安岡美佳, レーネ・ニルセン, “大規模シ

- システムのための参加型ペルソナ構築デンマークの電子政府事例より”, 情報システム学会誌, Vol. 10, No. 1, pp. 14-30, 2014.
- [5] 中尾哲雄, “富山の売薬と情報産業”, 日本ファジィ学会誌, Vol. 9, No. 5, pp. 656-660, 1997.
- [6] 古川 勝, 横山淳一, 永井昌寛他, “CRMの視点で見た家庭配置薬システムの可能性: コンティニュー認証機器を活用した日常生活圏医療”, 日本情報経営学会, Vol. 35, No. 2, 2015.
- [7] 古川 勝, “CRMの視点で見た家庭配置薬システムの可能性---家庭配置薬を活用したユビキタスネット時代の日常生活圏医療”, 日本経営診断学会論集9, pp. 25-33, 2010.
- [8] 高岡高等商業学校編, “富山売薬業史史料集”, 上巻, 下巻, 索引, 高岡高等商業学校, 1935.
- [9] 富山県, “富山県薬業史 / 富山県編”, 富山県, 1983-1987.
- [10] 植村元覚, “富山売薬業商圏の成立 (その1)”, 富大経済論集, Vol.2, No. 1, 1951.
- [11] 植村元覚, “富山売薬業商圏の成立 (その2)”, 富大経済論集, Vol. 2, No. 2, 1951.
- [12] 植村元覚, “富山売薬商人の商業経営---とくに懸場帳を中心にして, 社会経済史学 31(6), pp. 528-549, 1966.
- [13] 植村元覚, “富山の売薬業--懸場帳について, 近世越中の社会経済構造, 第2章”, 名著出版, 1975.
- [14] 坂井誠一編, “近世越中の社会経済構造”, 名著出版, 1975.
- [15] 水島茂, “加賀・富山藩政と越中, 近世越中の社会経済構造”, 名著出版, pp. 105-135, 1977.
- [16] 高瀬保, “富山売薬薩摩組の鹿児島藩内での営業活動-入国差留と昆布輸送”, 日本水上交通史第5巻, 文献出版, 1993. 6.
- [17] 阿部政太郎, “宗教的村落の成立とその変遷-立山山麓の宿坊村芦峯寺を例として-”, 富大経済論集, Vol. 1, No. 1, 1950.
- [18] 佐伯立光, “立山芦峯寺史考”, 立山町 (富山県):立山寺, 1957.
- [19] 佐伯立光, “立山史談”, 立山町 (富山県), 1965.
- [20] 木倉豊信編, “越中立山古文書”, 立山開発鉄道, 1962.
- [21] 寺口けい子, “芦峯寺善道坊諸国檀那廻りの実態”, 富山史壇, 67号, pp. 13-26, 1977.
- [22] 福江充, “近世立山信仰の展開:加賀藩芦峯寺衆徒の檀那場形成と配札”, 近世史研究叢書7, 岩田書院, 2002.
- [23] 福江充, “立山信仰と布橋大灌頂法会:加賀藩芦峯寺衆徒の宗教儀礼と立山曼荼羅”, 桂書房, 2006.
- [24] 福江充, “近世立山信仰の展開”, 博士 (文学)学位請求論文, 金沢大学, 2005.
- [25] 梅原隆章, “越中富山反魂丹の系譜”, 越中史壇, 第25号, 越中史壇会, 1961.
- [26] 桑野淳一, “越後毒消し売りの女たち:角海浜消えた美人村を追う旅”, 彩流社, 2008. 8.
- [27] 武知京三, “近代日本と大和売薬”, 税務経理協会, 1995.
- [28] 梅原隆章, “越中売薬と立山信仰”, 越中史壇, 第6号, 越中史壇会, 1955.
- [29] 道正 弘, “富山売薬と修験道”, 富山史壇 85号, 越中史壇会, pp. 23-32, 1984.
- [30] 兼子 心, “富山売薬の旅先における配薬の実態:立山宿坊の廻壇配札活動との関連性”, 富山県 (立山博物館), 2003.
- [31] ジャレド・ダイヤモンド著; 倉骨彰訳, “昨日までの世界: 文明の源流と人類の未来”, 日本経済新聞出版社, 2013.
- [32] 専修大学経営学部森本ゼミナール編, “大学生、限界集落へ行く「情報システム」による南魚沼市辻又活性化プロジェクト”, 専修大学出版局, 2016.
- [33] 國領二郎, “ソーシャルな資本主義”, 日本経済新聞出版社, 2013.
- [34] 金子郁容, 松岡正剛, 下河辺淳, “ボランティア経済の誕生: 自発する経済とコミュニティ”, 実業之日本, 1998.
- [35] 山岸俊男, “安心社会から信頼社会へ: 日本型システムの行方”, 中央公論新社, 1999.

参考 URL () 内は最後の参照日

- [u1] 坂森幹浩, “反魂丹伝説の成立について - 『富山反魂丹旧記』 の再検討” (2016/07/19)
<http://museums.toyamaken.jp/documents/documents011/>